BULLETIN OF JAPAN BOOK IMPORTERS ASSOCIATION

JBIA 洋書輸入協会会報

Vol. 32 No. 1（通巻368号） 1998年1月

謹んで新春の

お慶びを申し上げます

１９９８年1月

理事長　鈴木信夫

皆さん、1998年明けましておめでとうございます。余り良い年ではなかった昨年のこの新年会に私は初めて出席いたしました。思い出しますと、この協会の存続を問うというテーマを与えられた一年でございました。新年ではございますが、この一年の振り返りをしてみたいと思います。

昨年５月の総会で、その前年行われました特別委員会の様々なご意見を伺った上で、理事会としてのスタンスを秋頃はっきりさせることをお約束しました。その後の進め方に若干の手違いがあって遅れましたが、先頃皆様方に理事会としての特別委員会答申にかかわる判断、言い換えますとこれからの協会の方針につきまして文書を出させていただきました。一つ一つの細かい話はともあれ、「洋書輸入」という言い方は余り今日的ではないかと思いますが、この協会が持っている機能をもう少し活性化しなければならないことと、大きく言いますと今日本は色々な意味で変わらなければならない事だけははっきりしていますから、これまでの輸入協会の歴史を踏まえて、その上で何を変えなければならないのか、或いは我々自身のビジネスの変化をどうしなければいけないのか、その時協会が協力出来るものがあり、それが会員個々のメリットに繋がるのであればそのことに対してアクティブに行動すべきであろうという考えのもとに、あの纏めをさせていただきました。

目　次

新年の挨拶…理事長・鈴木信夫……1
理事会報告 ……2
退任の挨拶…前事務局長・神田俊二…3
就任の挨拶…新事務局長・高橋紘…4
文化厚生委員会だより ……4
出版文化史逍遥㉓ ……5
「なぜ」のライフスタイル……6
広　告 ……8

内容は幾つかありますが、例えば研修活動のようなことを一層活性化させようとしています。金融ビッグバンの問題やこの14日に文化庁の板東課長をお招きして催しします「マルチメディアと著作権」講演会など、従前の路線の数を増やしたのみという感はありますが、テーマとしてはたいへんタイミングの良い問題であると思います。こういうことに関して常にキャッチアップし続けて行きたいと考えております。

もう一つの宿題ともいうべきお互いのメリットに繋がる問題があります。「売り」の世界の話は非常に危険ですので、これはお互い公正にリングの上でファイトすることを原則とする、とすべきでしょう。としますとリングを作って色々なところで興行をうつ、そうしたビジネスの基盤作りの面で我々が同じことをしているならば、その中の経済的な共有という問題を考えてもおかしくはないのではないか、と思います。慎重に進めなければなりませんので、今年の段階では幾つかの公的な機関との話合いをしなければならないかと思っておりますが、ともあれ「仕込み」の部分についてはかなり共有出来るものがあると感じます。特に「ビッグバン」では外貨に関わる我々の機能の部分を共通にさせると色々なことが出来るかな、というヒントを先般のセミナーで得ましたので何か一つ考えてみたいと思います。

更に物流上の問題を加えて、以上三点程が昨年出された命題かと理解しております。

これらを今年やってみたい、ということころから新年の話に移ります。今年5月の総会へ向けての準備としまして、上記三点の他特別委員会答申に基づいた規約の全面見直しがあります。同委員会では、変えなければならない問題が現実に起きているのでその部分を見直すべし、とされておりましたが、理事会としてはこの機会に全面見直しをするという方針に置き換えました。いずれにせよ、総会までに幾つかの現場の作業を各委員会にお願いしなければなりませんが、規約については良く歴史を知り、良く事情を知り、良く皆さん方のお仕事を知る人々の集まりの中できちんと進めようという考えに立って、規約改定専門委員会を設置し、委員および委員長の選出に関わる手続きまで先般の理事会で決めました。従って、それが5月の総会の場で皆様方に提案される運びになろうかと思います。

総会後は総会時の幾つかの討議の結果に基づく活動になりますが、協会として今考えていることは、おおよそただ今申し上げたようなイメージでございます。それぞれの会社の事情があるでしょうから、何から何まで皆一緒と考えなくても良いと思います。提案に対して手を挙げる人々の集まりが協会の中に幾つか出来て行くことで協会全体に良い意味での回転と活性化がもたらされれば良いと考えております。

今後理事会や委員会の手順をきっちり踏まえながら、皆様方の合意のうえで物事を進めるよう努力いたします。決意表明のようになりましたが、今年の私からのお願いとご挨拶でございます。どうぞ一年間よろしくご指導くださいますようお願いいたします。

理事会報告

12月22日（月）

1. 収支報告
   11月収支につき総務委員長の報告を承認した。
2. 規約改正に当たり専門委員会の設置と委員の委嘱を決定した。
3. 委員会報告
   - 老朽化したルームエアコンを撤去する。（総務）
   - TIBF（東京国際ブックフェア）98出展数421社、380小間。
     洋書バーゲンセールに12社参加予定。
     France Year 特別企画、国際著作権シンポジウムなどが併催される。（事業）
   - 98年版資料収集完了、4月末刊行見込み。
     99年版以降の Agent List 電子化等については平行して検討し、理事会に報告する。（ダイレクトリー）
   - 各企画・催しの参加を一層幅広く呼びかけたい。
     新年賀詞交換会には62社、約180名の出席申込みを得て感謝している。（文化厚生）
   - 原稿の遅れが目立つ。月内発行を遵守したい。（会報）
4. 選挙管理委員長をアカデミア・ミュージック㈱、平岩社長に委嘱することを決定した。
5. 〔共同物流提案・アンケート〕を実施する。

退任の挨拶

神田俊二

5年前、理事会で内諾を得ているからという先輩の言葉に、総務委員長を僅か1年勤めた後で第3代の事務局長を安心（？）してお引受しました。

しかし、実際にはその直後に、理事長代理や理事の一部に交代があってコミュニケーションに疎通を欠き、定時総会では自ら次期の事務局長であることを自己紹介する羽目になったり、丸善から三代続いての就任に対する一部の方の反発もあったりで中々厳しい船出でした。

また、会員の中には事務局長の役割を自己流に解釈されて、まるで自社の新しい部下を得たような接し方をする人もあって、当初は可なりの戸惑いもあったのは事実でした。

けれども、会員の方々と接触を深めるに従い、この業界の大多数がとても知的な紳士や淑女で人間的にも素晴らしい人達であることが分かりました。

中でも、理事会や委員会の中心になる方々は協会での活動が自社の利益には直接繋がるものが殆どないにも拘らず、業界や会員のために黙々と多くの時間を割いている姿に頭の下がる思いでした。

アウトサイダーに見られる、単に業界やこの協会を批判するのみで決して他人の為には働かないエゴイストとは好対照だと思いました。

しかしながら、在任中の5年間の洋書業界は終始極めて厳しい環境の中に翻弄されておりましたので、善良な同業者が倒産したり倒産しないまでも洋書の業務の継続を断念したりで業界を去る方が多く、これらの方々を立場上単に優しく見送ることが出来なかったことに忸怩たる思いがします。

私が改めて申し上げる迄もなく洋書の商売というものは一見華やかに見えながら、これ程、最終利益という点でシビアであるということは実際にやってみた人でなければ理解出来ないものだと思います。

その為、円高傾向が著しかった時期には恰好の苛め対象としてマスコミから“不当利益を得ている最たる業界”としてなんと大げさに喧伝されたことでしょう。

和書に較べ僅か30分の1にも満たない売り上げの中で、世間には洋書の換算率の高さがまるで日本経済を大きく揺るがす様な大げさな表現で連日新聞紙上でバッシングされたことを思うと、やり切れない思いがします。洋書業界が悪者扱いにされた象徴的な事件としては、忘れもしない1995年3月9日、丸善他会員13社と事務局が公正取引委員会の突然の立ち入り検査を受け大量の書類を押収されたことでした。

しかし、あれから3年もしない内に円安傾向が進み、その上、洋書がどうやら余り儲からない商売であることが世間に認知されたのか、“公取事件”以後新聞からは全く洋書の文字は消えてしまいました。

その上、事件が落着しても一行に押収書類の返還がないので、昨年暮れに公取に問い合わせしましたところ、当時私が名刺交換した6人の担当官はいずれも名刺の部署には居らず、もうチームは解散してしまって、事件は既に“風化”が始まっておりました。

今、私は協会を去るに臨み皆様に申し上げたいことは、5年間この協会に席を置きマスコミや公取の多くの人達と接して来た中で、これらの大部分の人が洋書の事など殆ど何も知らない全くの素人であったのに新聞の活字になったり、公取が立ち入りをするとこれが大きな権威を発揮して世間には可成り重く受け取られてしまうという現実です。どこから見ても、これ程良心的な商売をしている業界は他にはないのですから、これからはその事にさらに自信を持って堂々と自己を主張する商売をして頂きたいと思います。そしてもう二度と世間に誤解を与える様な隙を作らない体制の整備をお願いします。

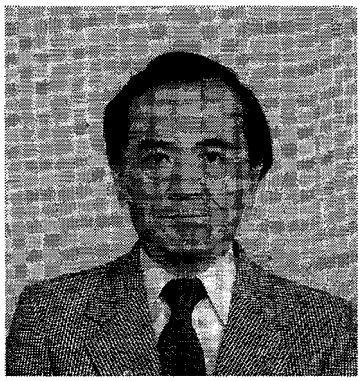
末筆になりましたが後任の高橋さんについては、6年間この協会の総務委員長や副委員長を経験され、更に定時総会ではずっと司会を務められた関係で協会内では既に評価が高く、経験、人柄共申し分ありませんので安心して後をお任せします。私同様宜しくお願いします。

終わりに、永い間、陰に陽にご指導ご協力を頂きました会員の皆様に心より御礼を申し上げます。

本当に有難うございました。

就任の挨拶

高橋　紘



明けましておめでとうございます。

この度神田俊二氏の任期満了に伴い、総務委員会のご推薦および理事会のご承認をいただきまして、昨年12月1日付けで事務局長に就任いたしました。ほぼ一か月にわたり神田前事務局長より事務局運営の手ほどきと事務の引継ぎを受け、年明けとともに独り立ちいたしました。不行き届きの点が多々あるかと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

さて、低迷を続ける日本経済と軌を一にして、洋書輸入販売業界も浮上の兆しがなかなか見えて来ません。商品の多様化、電子・通信技術の急速な発達など、私たちを取りまく環境は大きく様変わりして、伝統的な「洋書輸入販売」という商売の概念とその在り方を問い直す必要があるようにさへ感じます。とはいえ、海外出版社と読者の仲介者として、洋書輸入販売業界の役割の重要性に変わりはありません。その中核ともいうべきわが洋書輸入協会々員の皆様が、その豊富な知識と経験を存分に活用されれば必ずやこの難局を乗り切ることが出来ると確信しております。

特別委員会答申を受けて去る12月に理事会方針が打ち出されました。これを指針として協会は具体的な行動を起こすことになります。時宜に即したテーマによる勉強会の拡充、会員が等しくビジネス・メリットを得る機会の創出、現実に適合した規約の整備、出版・取引情報収集と提供の効率化等々、新たな年の幕開けを機に、協会の活性化を目指して、さらには会員の皆様個々の商いに何らかの形で寄与することを期して、その第一歩を踏み出します。

この時に当たって、当事務局に課せられた使命の重さに身が引き締まる思いがいたします。会員の皆様の付託にお応え出来ますよう精々努力いたす所存でございますので、一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

末筆ながら、この5年間事務局の運営効率化と機能の強化に腐心され、事務局を協会活動の重要な拠点に作り上げて来られた神田さんに、誌面をお借りして改めてお礼を申し上げると共に、今後のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

文化厚生委員会だより

72会忘年ゴルフコンペ

第86回72会は昨年12月11日（木）埼玉県の高根カントリークラブに3組12名のメンバーが参加し、天候に恵まれ家族的な雰囲気で開催されました。

日貿の内山さん、3年振りの参加でしたが午前中のハーフはOBと3パットの連続で苦しみながらも、午後は手堅くまとめて3位に入賞。丸善の戎井さんも午前中はボールの行方が定まらず苦労されましたが、さすが大阪で鍛えられた営業のプロ、午後は気を取り直してスタートホールでパーをもぎ取るや、そのまま快進撃、結果は2位。尚戎井さんはご自宅の横浜からでは間に合わないため前日東松山のビジネスホテルに一泊、翌朝NHKのラジオ体操で体をリフレッシュ、目標とされた馬券も当たりました。三善の斉田さんの目標はスコア86、ダブルボギーをたたくとバーディで取り返し、この勝負根性で昨年の高根のスコアを10打も縮めて見事に優勝されました。成績は下記の通りです。

		スコア	グロス	HC	ネット	新HC
優勝	斉田利幸（三善）	43•44	87	8	79	6
2位	戎井忍治（丸善）	56•49	105	22	83	17
3位	内山芳正（日貿）	50•45	95	9	86	8
4位	松浦拓巳（丸善）	51•49	100	14	86	
5位	諏訪弘史（丸善）	52•54	106	19	87	

BB　西山久吉（西山洋書）

ニアピン　内山、松浦

ドラコン　内山、斉田、和田（大洋交易）、西山

ベスグロ　斉田

尚、次回は3月27日（金）狭山CC。日貿・中林さんのコースです。　〔東亜ブック・鶴　記〕

出版文化史逍遙―西から東から―(23)

ウェブスターの輸入と日本近代化〔2〕

丸善・本の図書館　鈴　木　陽　二

◆幕末のウェブスター辞書移入の諸例（2）

1854年6月13日のニューヨーク・タイムズに「日本開港」という見出しの記事が掲載されているが、その中にペリーが皇帝（将軍）と皇后（妃）に贈った品々が記載されている。それに続けて「贈物の中で最高のものは、皇室（幕府）の通訳の一人がもらったウェブスターの辞書であろう」と付言している。前回通詞堀達之助がウェブスター辞書を贈られたことに触れたが、恐らくこの件と合致するものであろう。

前島密は日本の郵便制度を創始したことで有名な明治の逸材であるが、彼が慶応元年（1865）に薩摩藩開成学校の教授として招聘されていた折、礼服を着用して出頭を命じられ、藩公より木箱入り袱紗包みのウェブスター辞書を見せられたという逸話が残っている。流入経路や島津藩主が入手した年代は判明していない。

さて、万延元年（1860）に日米通商条約の批准のため幕府が大使節団を派遣したことはすでに触れたが、福沢諭吉は、通訳として同行した中浜万次郎と一緒にウェブスターの辞書を購入して持ち帰ったことは有名な史実である。福沢は洋綴・洋装丁を研究させるために製本業者に渡して本を解体してしまったため、これがウェブスターのどの版であるかが不明であった。しかし偶然の機会に、岩崎克己先生が中浜万次郎の署名入りのウェブスターを古本屋で発掘したことから、判明することになった。一緒に購入したものであるから、福沢も同じ版を手に入れたものと想定して間違いはないであろう。それはウェブスターの大辞典ではなく、“An Explanatory and Pronouncing Dictionary of the English Language. With Synonym. Abridged from the American Dictionary of Noah Webster”（1859）という縮抄版であった。この版は、ノア・ウェブスターの女婿チョウンシー・グッドリッチの監修で子息のウィリアム・G・ウェブスターが編纂したものであった。

ところで、幕府は戦艦の購入を計画してアメリカに発注したが、その引き取りのため慶応3年（1867）に勘定吟味役小野友五郎を正使とし、福沢に翻訳御用を命じてアメリカに派遣した。この時福沢がアップルトン社より膨大な書物（20箱）を購入して帰ったが、幕府の本の購入を巡って上司の指示に従わなかったとして帰国後謹慎を命じられ、荷物も幕府に差し押さえられたことは有名な事件であった。4か月ほどして謹慎が解かれ、荷物も引き渡されて問題は決着したが、この時福沢が購入した本の種類と量は判明していない。しかし、出発前に和歌山藩と仙台藩から書籍の購入を依頼されており、そのうち仙台藩のために購入した洋書の内容が、『藩学養賢堂蔵洋書目録』（早大図書館蔵）の発見によって判明することになった。そこには、ウェブスターの『アメリカ大辞典』42冊を始めとして、6種類90冊のウェブスター辞書がリストされている。仙台藩のためにこれほど多量のウェブスターを購入したことを考えると、自分の英学塾用を含めて、いかに莫大な量の辞書を購入して帰ったか想像に難くない。

ニューヨーク・タイムズの1867年6月26日に「日本に送られるアメリカの教科書」という記事が掲載されている。それには「最近わが国を訪れた日本の代表団は（中略）パトナム社に、今後使用する教科書を日本政府に供給するよう委託した」と記し、1万3,000冊の本が60箱・約10トンの荷物として出荷されたことを報じている。この中に2,500冊の種々のウェブスター辞書が含まれていた。明記していないが、小野友五郎による幕府の注文であったと思われる。彼は戦艦の代金と回送費用の一部を後払いにして、「必要書籍」そのほかの物品を購入した（藤井哲博『咸臨丸航海長小野友五郎の生涯』）。

幕末におけるウェブスター辞書の移入の例をいくつか紹介したが、筆者が目にしたものでもこれ以外にあり、また丹念に探せばまだまだ見つかるのではないかと思っている。それにしても、幕末におけるウェブスターの流入は想像を越える数量であったことにあらためて驚嘆を覚える。日本の近代化に果たしたウェブスター辞書の貢献の大きさが、この移入量によって実感できるのではないだろうか。〔参照図書：毎日コミュニケーション『外国新聞に見る日本1852－1873』／岩崎克己「徳川時代における英語辞書の舶載」／池田哲郎「Noah Webster の辞典と綴字書を巡って―アメリカと日本―」〕

「なぜ」のライフスタイル

—「なぜ人はエスカレーターの左側に立つのか」から—

島岡　丘

東京では地下鉄のエスカレーターに立つのは左側である。地下鉄だけでなく、東京にあるデパートでも同じくエスカレーターに乗るときは左側に立って右側をあける。「東京では」と書いたのは、大阪ではその逆にエスカレーターの右側に立ち、左側をあけるからだ。エスカレーターに乗るのではなく、特に大阪ではエスカレーターで歩くことが日本一多いそうである。大阪は歩くことが多いのと時々歩くを合わせると全体の35%で、東京の25.2%、鹿児島の16.2%と比較しても忙しい人が多いことを示しているのだろうか。(大谷晃一『大阪学』(新潮社))。このようにエスカレーターを歩く人が多いとどちらか一方をその人たちにあけてあげなければならない。しかし、どちらかをあけるにしても同じ国なのにどうして東京は右をあけ、大阪は左をあけるのだろう。

昨年の12月27日午後のＮＨＫのラジオ番組で、ロンドン、モスクワ、ウィーンなどのエスカレーターに乗る際、どちら側に立つかを聴取者からの情報をもとに番組を興味深く進めていた。ロンドンではSTAND ON YOUR RIGHT. KEEP THE LEFT CLEAR の表示があるとのこと、またそのほかのヨーロッパ各都市ではすべて右側に立つとのことである。モスクワでエスカレーターの左側に立っていたところ、恐い中年のおばさんに怒られたという経験者のことも取り上げていた。

東京でエスカレーターの左側に立つ理由はわからなくもない。ロンドンの地下鉄駅のエスカレーターは早く上下するのでベルトに利き手で掴むことになるだろうが、それに較べてゆっくりと動いており（1分30メートル)、左手でベルトに軽くふれるか、あるいはふれなくても大丈夫のような感じである。利き手の右手は自由に動かすことができるように左側に寄るのだろうか。歴史的には江戸の武士は刀を左にさしていたので相手にぶつからないようにする必要があったので左側通行になったということも考えられる。戦後、急に人は右側通行と指令が出て、歩行者が混乱したことがある。歩行者は左側通行の習慣が長い間続いてきたからである。特に指示のないところでは、長年の習慣のせいで左側を歩くようだ。もう一つの理由をあげれば、人間の心臓が大部分左側にあることが関係しているかもしれない。トラックを走る場合、オリンピックのトラック競技やスケート競技を含めて、すべて左側に走る。エレベーターでも人は左に向かって進む傾向があり、それを想定して自動エレベーターでは向かって右に階を示すボタンがついているところが多い。

何年か前のことであるが、UCLA の Ladefoged 教授宅で夕食を共にしたとき、なぜトラック競技は時計の反対回りに走るのかが問題になった。私は心臓の側に回るのが自然ではないかという説をとなえたが、はっきりとした理由を言う人はそのテーブルにはいなかった。ただ、一つ感心したのは、その答えが見つからなかったとき、そのままにせず、同教授はすぐに立ち上がり、居間の本棚から大きな百科事典を持ってきて食卓で開き読み始めたのである。その百科事典からはっきりした解答が得られなかったが、同教授の新しいことを知ろうとする探求心、また辞典を引くのを日常茶飯事のようにしていることを目のあたりにして、本物の研究者のライフスタイルのようなものを感じた。私と同じような経験をしたことを友人の川島淳夫君（独協大学教授）から伺った。3つの博士号をもつドイツの著名な学者 Zwirner 教授宅に招かれたとき、会話中でわからないことがあると全20巻ほどもある Meyer 百科事典から関係ある一冊を取り出して調べたそうである。食卓についているときでも、「調べる」(E : investigate, G : untersuchen) ということを日常的に重視している生き方を学びたいものだ。答えが得られる得られないは別として、未知な情報を得る態勢がある場合とない場合とでは、将来の人生で随分と差が生じるような気がする。

私の小学校の頃、クラスで質問箱運動というものがあった。無記名で知りたいことを質問用紙に書いて、その解答はクラスの班別で答えるのである。私が答える役になった質問は「山の高さはどうやって計るのですか」だった。私は家族やまわりの人に聞いたが、「さあ、どうするのだろうね」と言うばかりで教えてくれる者は1人もなく、自分だけで悩んでいたことがある。今なら図書館も充実しており、親切な図書館員もいるので、調査資料も測量方法も教えてもらえるだろう。

未知なることをいろいろな手段で調べようとするライフスタイルと教科書に書かれていることをまず理解するというライフスタイルとではほんの僅かな期間でも随分と差ができてしまうものだ。「まず教科書に書いてあることを覚えなさい」という態度よりは、「まわりのこと

に関心を持ち、疑問に思ったことはどしどし質問しなさい」というほうが教育的である。

現在はテレビが普及しているため、テレビから一方的な情報が家庭内に流れ込み、テレビで話題にならないものには、あまり関心を持たなくてもよいというような風潮になってしまうと、人間の成長の過程で何か大事なものが欠けてしまうことはないだろうか。

英語の習得についても同じことが言える。なぜそうなのかということを抜きにして、もっぱらモデルを反復し真似る方式では、部分的なことしかわからないのではなかろうか。一つの文でもじっくりと考えてなぜそうなのかを解明しようとすれば、1を聞いて10を知る、あるいは1つの文を100倍楽しむことだって可能である。

日本人の誰でも知っているとされる This is a pen. をとりあげ、なぜの答えを考えて見よう。

1　なぜ This と pen を強く言うのか。
2　なぜ This よりも pen を強く言うのか。
3　なぜ This も is もその後に母音がつかないのか。
4　なぜ is は母音＋子音なのか。
5　なぜ a は an でないのか。
6　なぜ is で切れないで、is ˆ a のようにつづけて言うのか。
7　なぜ pen の p は日本語の p よりも強く聞こえるのか。
8　なぜ pen の n は「ン」と発音が違うのだろうか。
9　なぜ主語のあとにすぐ動詞の is が来るのか。
10　なぜ pen のところで音調が下がるのだろうか。……

それぞれの答えは次の通りである。

1　this は指示代名詞、pen は名詞。一般に名詞、動詞、形容詞、副詞は強く発音し、代名詞（指示代名詞、疑問詞などを除く）、前置詞、接続詞を弱く発音する。

2　文末には音調が加わるから。文頭が強くなるのは特殊な場合で、Who did it？に対して、I did. と言う場合は I が強く際立って発音される。

3　日本語と音声体系が異なるため。日本語では子音の後に母音がつく音節構造（開音節）であるのに対し、英語では開音節ほか閉音節が少なくない。

4　開音節の子音＋母音が言語的には自然であるが、英語では開音節のほかに閉音節があるために母音＋子音の形が生じる。しかし、is を何回か繰り返して言ってみると si のように聞こえてくる。

5　不特定の名詞でそれが一つのときは a または an をつける。a の次が母音で始まる名詞ならば a でなく、an になる。

6　子音＋母音、子音＋半母音は繋がるのが自然である。This ˆ is も同様だが、トピックとコメントを分けたいときは繋がらない。

7　p, t, k が語頭または音節頭に表れ、その後が母音または半母音のときは、英語では気音（一時的に強く息が出ること）が共に出るので強く感じる。別な言い方をすれば、p, t, k の後続母音、後続半母音は無声化する。

8　「ン」は鼻と口の両方から声が出るのに対し、pen の n は鼻からのみ声が出る。また、舌先が歯茎にしっかりとつく。

9　類型的に言って、日本語の語順は SOV 言語で、英語は SVO 言語である（S は subject 主語、O は object 目的語、V は verb 動詞）。

10　一般に疑問文と平叙文に分けることができるが、疑問文は語尾が上がり調子でいうことが多く（上昇調）、平叙文は下がり調子で言うことが多い（下降調）。

人間は右か左かどちらかが利き腕であるが、中には両腕利きがいるそうだ。それを ambidextrous という。猿は木から木へ気軽に飛び移ることが出来、両腕利きであることが想像される。ただし、ambidextrous はあまりいい意味では使われない。「器用な」という意味のほかに「二心のある」の意味にも使われる。

長年われわれは右手で箸を持ち、右手で文字を書いてきた。利き腕を無理に変えようとすると、ことばに障害が出るとして、イギリスの元首相チャーチルの例がよく引き合いに出される。人間の脳についてまだまだわからないことが多い。20世紀の後半われわれはパソコンを使うようになり、両手を使ってキーボードを打って文章を作成することになった。これはバランスがよいので、大脳にとっても良いのであろうか。それとも、利き手のほうを使って作文をしたほうが良いのであろうか。パソコンは挿入、修正、追加、移動など自由に出来るメリットがある。あまり便利なため、よく考えずにキーボードをやたらに打って不完全な情報を多く流しすぎてはいないだろうか。いずれにしろ「なぜ」ということを常に考えていきたいものである。

（茨城キリスト教大学教授）

BBC EDUCATION & TRAINING

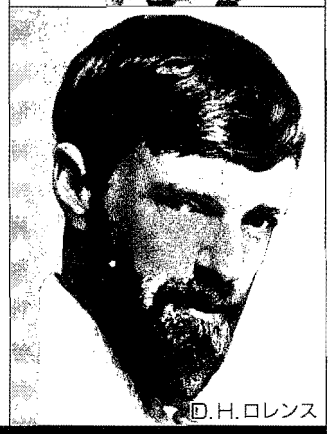
BBC VIDEO LIBRARY

組織力・企画力・取材力を結集して制作したプログラムの数々

貴重な記録映像とインタビュー、
一級の研究者によるコメントで
構成されたBBCの大型企画。

最新刊

ジェイムズ・ボールドウィン


D.H.ロレンス

GREAT WRITERS OF THE TWENTIETH CENTURY

20世紀の偉大な作家たち

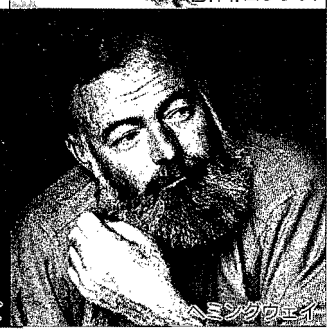
ビデオ全24巻（各巻50分・オリジナル英語音声版・英文スクリプト付き）

価　格　全24巻セット　¥830,000（税別）
　　各　巻　　¥38,000（税別）

制作・著作　英国放送協会（BBC）1997年

ジェイムズ・ジョイス

H.G.ウェルズ


ヘミングウェイ

CDI

BBC（英国放送協会）ワールドワイド社　日本総代理店
株式会社 キャリア・デベロプメント・インタナショナル
グローバルメディアグループ
東京都港区三田3-13-16 三田43 森ビル7F 〒108-0073
TEL.(03) 5445-2959　FAX.(03) 5445-2937

SONY Group

1998年1月　通巻第368号　洋書輸入協会　編集者　高橋　紘
〒103-0027　東京都中央区日本橋1－21－4　千代田会館5階20号室　☎(03)3271－6901　FAX.(03)3271－6920

印刷所＝藤本綜合印刷株式会社